

支那戯曲小説中の豊臣秀吉^一

青木正児全集第七卷

文禄元年（明の萬曆二十年）太閤秀吉が大兵を發して朝鮮を征伐した壮挙は、少からぬ驚きを明人に与えたらしい。是よりさき嘉靖（我が天文）の頃から浙江の沿海及び江蘇の揚子江沿岸の地が、じはじは倭寇の為に劫やかされ震へ上つてゐる箭先に、倭寇の巨魁とも思はれてゐたらしい関白が大兵を發して朝鮮を風靡し、將に遼東を犯し山海関に入り、北京までも押し寄せんず氣勢を示して来たのであるからして明朝政府の狼狽は察するに余りありである。「明史」日本傳に「唐人、倭を畏るること、虎の如し」云々とあるは、吾々に取つて一寸痛快である。蓋し倭寇の恐ろしさは、今も浙江の寧波あたりに通行する子守唄に、

倭倭来、髣髴来、

倭寇が来た、どんど（太鼓の音）と来た、

阿拉圀圀馴熟来。

そうら坊やねんねしな

と云つて小兒を嚇して眠せつける用に供せられてゐる程である。

— この文章は中国文学者青木正児が昭和二年（一九二七年）、文芸雑誌『黒潮』に発表したものである。當時の時代状況を反映してか、あるいは文芸雑誌という発表媒体のせいにか、秀吉の朝鮮出兵を「壮挙」と呼んだり、突然の襲来に狼狽する明朝政府を「一寸痛快」などと表現したりしている。この文章を読む際には、こうした戦前の知識人のアジア観や歴史観についても注目してほしい。

是に於て明の政府は師を興し往きて援けしめることになった。先づ兵部侍郎（陸軍次官）宋応昌を経略（總司令官）に任じ、武庫郎（兵站部づきの官）劉黃裳と職方主事（參謀本部づきの官）袁黃とを以て贊画（參謀官）に任じ、大將軍李如松を以て東征提督として朝鮮に出征せしめた。此の戦に於て「明史」の「朝鮮伝」及び「日本伝」に記す所は、李如松が平壤に大捷し、我が小西行長は大同江を渡つて龍山に遁れ還つたので、それまで朝鮮が失つてゐた黄海・平安・京畿・江海・四道の地を取り戻し、勝に乘じ長驅して碧蹄館に至り、遂に大敗北を取つた事になつてゐるが、それは事実を飾つた政府

への報告書か何かに本づいた誤伝らしい。

明末清初の大詩人たる錢謙益が当時の実況を目撃した者の実話を記した「東征二士録」（初學集にあり）によれば、此時行長の軍は平壤の風月楼と牡丹台とを保ち、如松の軍が総攻撃したを下す能はなかつた。行長は夜半凍れる大同江を渡り、こっそり龍山に退却した。如松はそれ



韓国釜山に上陸した日本軍（釜山鎮殉節図）

とも知らず翌朝又総攻撃を始めた。やや久しくして始めて日本軍の退却した事を知り、大威張りで大將旗を押し建て空っぽの城に繰り込んで往った。日本軍は「進めば則ち魚貫して營し、退けば則ち捲簾して撤す」実に巧妙な戦法を以てし、退却しつつ多くの虚塁を設けて敵を欺いてゐた。如松が平壤から龍山へ攻め寄る途中、開城に至った時など、朝から正午頃まで盛んに攻めたが、城中寂として人声無し、梯をかけて兵を入らしめて見ると空城である。乃ち設けてあつた旗や槍を分取りし、道傍に死んでゐた鮮人の腐れた首を切り取って再び大捷を報じた、云々と記してある。「明史」に所謂如松軍の大勝の内幕は、ざっとこんな馬鹿々々しい支那一流の捷報であつたらしい。錢謙益はなほ記して謂ふ、鮮人は如松を恨み、之を欺いて曰く、日本軍は王京を棄てて遁れたと、如松は驕つて貪り、西兵南兵を戒めて江辺に列營せしめ置き、自ら遼兵（満洲兵）三千を提げて独り進み、碧蹄館を過ぐるに、土人また日本軍は遁げたと告ぐ、彼益々喜んで輕騎疾馳し大石橋に至り、馬が蹶いた為に転び落ち右額を傷き、正氣づいて復た馬に飛び乗つて見ると、橋の向には日本軍の旗指物が林立してゐた。驚いて其の部下と橋を小盾に必死に戦つたが、日本軍の攻め寄る者益々衆く、白刃は如松の重鎧に及んだ。たまたま楊元の援兵が来たので辛じて免るを得て開城まで退却した。此時総司令の本營は定州に駐つて居り、如松の軍と相去る八百里（約我が百里）小西行長は龍山に拠り、加藤清正は咸鏡道から廻つて鴨緑江を趨截したので、明軍は前後日本軍に挟まれ、計略全く手も足も出せなくなつてしまつた。そこで馮仲饒なる者の計により、清正と行長との不和を利用して両者の離間策を企て、清正を説き服せ、やや其の効を奏したことを記してある。此役は前後七歳の長きに亘り、明軍喪ふ所の師数十万、明国に於ては

とても勝つ見込が立たず、弱りきつてゐた所に、たまたま秀吉が死んで日本軍が悉く引き揚げたので、明は漸く難を免れてや枕を高うし得る日が来たのである。

此役は我国人に取っては極めて痛快な壮挙であつたが、明国に取ってはまことに迷惑千万な頭痛事であつたに相違無い。彼等が関白秀吉の死を如何に喜んだかは袁黄の著と称する「斬蛟記」なる短篇小説がそれを物語つてゐる。袁黄字は了凡、前述の如く此役に参謀官として総司令の宋応昌を佐けて種々画策する所のあつた人である。此の小説の篇末に附記した陳眉公（明末の人）の語によれば、或は了凡の作とし、或は了凡を嘲る意味で名を了凡に託して他人が作つたものとされてゐると言つてあるが、いづれにしても此役を去ること遠からざる万曆末年の作であるらしい。今其の大要を語らう。

関白平秀吉は日本人でも無く、中国人でも無い、蓋し妖怪変化の者である。昔、旌陽許真君が蛟を斬つた時、一匹の小蛟が有つて其の腹から出た。小蛟は未だ別に犯せる罪が有るわけでも無かつたからして、誅を加へず其ま江中に縦つて大海に帰せしめた。すると其の小蛟は日本の紅鹿江なる銀蛟山に往つて住んだ。それから一千二百余年間、物類を害すること記し尽くせぬほどであつたが、今や又化して人となつた、其れが即ち平秀吉である。秀吉は一兵卒より身を起し旧関白を殺して其位を奪ひ、智力を以て六十六洲を征服し、各洲の民は其の妖精なるに気付かず、但其の奸智に長けたるを見てひたすら之に畏服してゐた。琉球や朝鮮も之に朝貢し敢て礼を失はなかつたが、突然万曆二十年四月に至り、彼は二十余万の大軍を率ゐて朝鮮を犯し、對馬から釜

山鎮に上陸した。鮮人は風を望んで逃遁した。秀吉は王京に抛り、行長は平壤に抛り、清正は安辺に抛り、沿道には皆兵を屯せしめて互に連絡を保ち、其意は実に遼東を犯し北京まで攻寄せんと欲するらしいのであった。朝鮮は我国に急を告げて来た。乃ち朝廷は宋公を総司令とし、予（これは了凡の自称である）及び劉玄子をして参謀として出征せしめた。

遼陽に至る頃、蒙仙師が程師兄（洞真）を遣して鷺を三千六百羽買ふから銀を出せと云つて来た。（案ずるに袁了凡は道教を好み「祈嗣真詮」「陰騭錄」等其道の著がある。所謂蒙仙師は彼の道師であり、程洞真は其の道友に擬したのである）余は二百余両の金を出して彼に与えた。すると程師兄は許真君（前に見ゆ）の後裔なる計道源と共に諸所に鷺を買ひ集めに歩き、漸く三千六百羽の数を揃へた。乃ち祖師（蒙仙師）は弟子張英接を遣し此の鷺を携へて先づ東海に浮ばしめ、自らは黄石公・徐茂公・丘長脊及び許・張兩人の弟子を伴ひ、亦海に浮んで銀蛟山に至り、やがて其所に到着した。見れば其石は楮の如く、其水は茶の如く、其山は秃山で草木無く、両方の崖には夥しく羽毛が堆積されてゐて、深きは丈余、浅きも六七尺はある。（これは蛟が長年食つた鳥獸の遺骸を意味する）祖師は鷺の群を江中に放ち円形に囲ませた。鷺群は争い鳴いてすさまじい響を立てた。黄石公はまじなひの符を書いて法を行つた。すると一物が囲みの中に在つてぬつと首をもたげた。其のさま巨鐘の如く、赤髪面に被り其面甚だ醜く、両眼は黄色できらきらと光つてゐる。祖師は矢庭に劍を揮うて一撃するよと見れば其頭はころりと墜ち其身は水面に浮んで来た。長さ約数干丈、蛇形にして魚鱗あり。あたりは霧の如く白き一種異様の氣が充塞して、咫尺を辨ぜず。やや暫くして氣は霧れ、祖師は徐茂公に命じて其首を取つて之を埋めしめた。

是れ実に万曆二十一年正月七日の事であつた。

此時余は義州に在り、妖星が東より飛んで墮ちたを見て、心に関白が死んだのだな、もう大丈夫だと思つた。其後自分は官職を棄て急ぎ都へ帰る途中に徐師兄に遇つた。祖師の在る所を問へば、日本から扶桑を過ぎ大小琉球を経て八月に至り始めて返ると云ふことであつた。自分はさきに軍中に在り、かの斬蛟の事を以て極めて秘密にしてゐたので、誰も知る者は無かつた。我軍のみならず行長等と雖も知らなかつたらしい。関白の部将王卿等も亦蛟の化物であつたが、彼等はまだ罪が浅かつたので祖師は未だ誅戮を加へ無かつた。しかし彼等倭人は以前の如く進軍して来なくなつた処を見ると、関白の死んだことは明白だ。

以上が此小説の太要である。極めて神怪的なものであるが、以て如何に明人が秀吉の勇猛を恐れ、とても正面からの戦では我軍に敵する能はず、たまたま関白の死によりて此の国難が救はれた事を喜んだかを見るに足るであらう。

次に明の天啓年間（我が元和七年より寛永四年頃まで）四明山環谿漁父（本名未詳、四明山とあるから浙江の寧波附近の人らしい）の作つた戯曲に「蓮囊記」と云ふのがある。此作には背景として朝鮮の役を用ゐ、秀吉が影幕に使はれてゐるのである。今此の戯曲の本文は伝わつて居ぬらしく、有れば極めて珍本であるが、幸ひ「伝奇彙攷」卷二に其の梗概が載せてある。今其の要領をかいつまんで見る。

杭州に徐嘉と云ふ青年が居た。彼は文毅の娘文娉と私かに恋に落ちてゐた。或る宴会の席上で

酔後彼はそこに居合はせた沈惟敬を嘲ったので惟敬は恨を含んで居た。是時日本の平秀吉が朝鮮を犯し、明軍は之と戦つて破れたので、和議を講ずるため之に赴く使者を募った。沈惟敬は日本語が出来たので其選に当り、通訳として関白秀吉の所へ使する事となつた。彼はかねて恨んでゐた徐嘉と文娉との恋を破らうと企て、文娉の肖像画を携へて秀吉に献じ、且つ兵部尚書（陸軍大臣）石星に説き、美人文娉を関白に与へて其の歡心を買はんことを計つた。石星は其言を容れ、惟敬をして文娉を求めしめた。遂に文娉は残酷にも計略の犠牲として捕へられ、朝鮮に送られることとなり、父母と生別し、一僕を伴つて悲しき旅路に上つた。是より先、徐嘉は呉の忠臣伍員を祭つた呉相国祠に於て夢中神靈より宝剑及び劍術の秘法を授かり、文武兼備の良将となり、此役が起るや召されて総帥となつて日本軍と戦つて居た。時たまたま玄文娉は関白の所に送らるる途中、其僕が徐嘉の陣營の附近をうろついてゐたので、兵卒等は僕を以て敵の間諜と疑ひ、捕へて之を將軍の前に引立てて往つた。茲に図らずも其僕の口から文娉が難儀に遇うてゐる事が明かになつたので、凱旋の暁は結婚する旨を文娉の父に書面を認めて僕に持ち帰らしめた。然るに一方沈惟敬は軍令と詐り、将に文娉を秀吉に献ぜんとしてゐるので、徐嘉は驚き急に進撃して秀吉を走らせ、逐に惟敬を擒にして京師に送り、文娉を救ひ出して目出度凱旋した。惟敬は斬罪に処せられ、徐嘉は功により靖海侯に封ぜられ、文娉と結婚し、伍員の廟を重修して其徳に報いた。

次に今一つ清の康熙年間（我が寛文より正徳頃まで）夏敬渠の著「野叟曝言」と云ふ長篇小説の第一百十六回・一百二十九回及び一百三十回に秀吉の事が描かれてゐる。此の小説に於て秀吉

は朝鮮征伐には関係無く、浙江沿海を犯した倭寇の巨魁として見はれてゐる。そして其の姓名を「関白木秀」とし、其妻を「寛吉」としてある。按ずるに木秀とは木下秀吉の省略であり、寛吉とは秀吉の吉の字を割き取り寛の字をでたらめに添えたのであらう。

第一百十六回に於ては此の小説の主要人物たる文素臣と云ふ英雄が浙江の賊を平げ日本に押し渡り、かねて密かに日本の城内に遣して置いた三人の女將軍の伏兵と内外相応じて攻め、大いに日本軍を打破り、関白木秀・行長・宋素卿及び倭將四名倭兵六十五名を擒とし、歸りて天子に獻ずる事を描いてある。第一百二十九回及び三十回に至つて此の話は更に次の如く展開してゐる。

関白木秀等は属国として朝貢することを約し、免されて本国に歸つたが、後朝貢を怠り、日夜兵を練つて昔日敗降の恥を雪がんことを欲して居る。乃ち朝廷は文容・奚勤兩人の者を使者として之を詰らしめ、一面には海防を嚴にして倭寇に備へしめた。文容・奚勤は四月二日に本国を發し五月十日日本に達し、関白の居城に到つた。宋素卿が之を出迎へ、使者兩人が婦人のやうな美男子であるのを見て、其由を関白に伝へると、関白は非常に喜び、彼のもちまへの淫心を起し、先づ使者を遇するに款待を以てし、慇懃に酒を勧め、酒中に魔睡薬を入れて盛りつづし、人事不省に陥らしめて了つた。遂に侍女等に命じ兩人を浴室に搬び洗はしめる。先づ文容の衣服を脱せしめると渾身羊脂白玉の如く美しい。関白夫人付きの一侍女が之を竊み見て飛ぶが如く夫人の方へ走せ去つた。侍女共は夫人に知れては大変だと大急ぎで文容を洗ひ終つて傍に隠し置き、奚勤の衣を脱して洗ひにかかつてゐると、夫人寛吉は侍女の報を得て大いに怒り、そんな美男が来たのに妾に知らせぬとは不都合だ、大方あのすき者めが自分で物にせうと思つてゐるんだらうと云つ

て、侍女中の剛力佛眼児・佛手児を遣し奚勤を丸裸体のまま奪ひ去って往つて了つた。木秀の侍女共はせん方なく文容一人を携へて木秀の居室に戻り事の由を報告した。木秀は侍女を退け、睡つてゐる文容を見て慾心燃るが如く、其身辺に近づいて將に雲雨を起さんとしたが、又思ひなほして、かかる昏睡状態のままでは興が薄いと、藥を飲せて之を醒させた。醒め来つて文容は木秀の己に戯るるに驚き、脱れんともがけど剛力の木秀に擁せられて身動きも出来ない。乃ち詐りて歡容を作し、意に従ふべければ先づ我が衣服を着けしめよと云ふ。木秀手を放す。文容隙をねらつて刀を把つて木秀に切つてかかる。木秀は笑つて椅子で受け止め、互に格闘あり。文容は遂に敵せずと見て、かかる倭奴の毒牙にかからんよりはと自ら首を切つて死んで了つた。一方寛吉は奚勤を得て喜び、亦藥を以て其の睡を醒し、互に酒を酌み交して歓談し、相携へて伏戸に入つたが、暫らくすると忽然大声に叫んだかと思ふと兩人は已に其まま死んで居る。侍女共は打驚き木秀に報告する、そこで大騒ぎとなり、喇嘛僧を招いて三日の間法養を営んだ。

文容・奚勤兩人の棺が本国に持ち歸られた。文容の妻は夫の非命の最後を悲み自殺して了つた。其子寤生・長生の二少年はけなげにも父の仇を報ぜんと日本に渡り、夜半木秀の陣營に忍び入り、却て擒へられた。木秀は穴倉の中から出て来て二少年の天々たる姿を見、又善からぬ心を起し、其父と同様手段で之を弄ばんとしたが、父文容の亡霊があらはれて少年を救ふ。其所へ文容の友錦囊が兵を率ゐて攻め来り、亡霊と力を合せて遂に木秀を擒にし、目出度本国へ凱旋した。

以上が其の概略である。「斬蛟記」及び「野叟曝言」に描かれてゐる秀吉は猛悪無道の妖精、鬼のやうな蛮族の酋長であつて、我が不世出の英雄豊臣秀吉の誇を毀けること甚しいものであるが、

それにしても外国の小説にまで描かれて其の雷名を轟かした事は吾吾の痛快を覚ゆる所である。此外にも搜したらもつと面白い話があるかも知れぬが、余の性疎懶にして強ひて勉めて穿鑿することを好まぬ。これはただ平生折にふれて余の目に見あつたものを紹介して以て話柄となすに過ぎない。(昭和二年二月「黒潮」)